

---

# 俺と2人の文月ライフ

朝露

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と2人の文月ライフ

### 【Nコード】

N0914P

### 【作者名】

朝露

### 【あらすじ】

吉井明久の幼馴染、湊と夏澄。原作には登場しないはずの2人の介入によって、この作品はどこまで原作とかけ離れて行くのか！それは誰にも分からない！！（作者にも）。オリキャラ・湊視点で送る、IFの物語

## プロローグ

俺がアイツら2人と出会ったのは5歳のときだった。母親たちの仲がよかつたらしい。その血をひくためか、俺たちもすぐに仲良くなつた。家が近かつたため、小学校、中学校も同じでしかも9年間クラスも同じで。だからいつもつるんできた。周囲の目から見たら、さぞ奇妙に見えただろう。3人組のうちの1人は女子だったから。中学生になっても変わらなくて、まあ俺とアイツが付き合い始めたつてのもあるけど。

ただ、高校まで同じになるとは考えてなかった。さすがに高校までは同じにならないだろうとみんな思ってた。だから、みんなびっくりしてた。

でもまあ、俺は普通に学校生活が送ればいいんだ。学力的に心配だけど・・・

俺たちでさ、すっげえ楽しくしようぜ。俺たち3人で掛かれれば出来ないことなんてない！

そうだろう？ 明久、夏澄。

## プロローグ（後書き）

短いです。ごめんなさい！何番煎じか分かりませんが、よろしかったらご覧ください！！

## 試召戦争編 第1問

今世間で最も注目を集める新設校・文月学園。“試験召喚システム”という新技術を試験採用している進学校で、俺たちの通う学校でもある。その校門へと俺たちは猛ダツシユで向かっていた。もちろんその理由は、寝坊である。

「おい！はやくっ！」

「寝坊したの、ミナだろっ！夏澄、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！あっ、あれ」

「どうしたっ」

んだ！と、続けようとしたりセリフを遮るように、朝っぱらからよく響く怒号が聞こえてきた。

「遅いぞ、お前ら！」

「あっ、おはようございます。西村先生」

「おはようございます。先生」

「おはようございます。せっ・・鉄人先生」

「その名で呼ぶな！しかも、なんで言い直した！」

校門に立っていたのは、生活指導・西村教諭。人間離れた肉体を持つ通称・“鉄人”。

「それよりも、言うことがあるんじゃないか？」

「遅れてすみませんでした」

「ええっと、今日も肌が黒いですね」

「朝から声がよく響きますね。やっぱり、腹筋が大事なんですか？」

「お前らは遅刻の謝罪よりも、俺の肌の色や声の響きのほうが大事なのか？まともに応えたのは東風谷だけか。・・・まあ、いい。受け取れ」

そう言つて、俺たちに1つずつ茶封筒を差し出した。みんなが一斉にその中に入った紙を開くと、そこに書かれていたのは『F』。

「あれ？ちよつとまつて！？僕とミナはともかく、なんで夏澄がFクラスなの？」

「俺も驚いたぞ。全教科無記名は今までで初めて見たな」

「もしかして、それで落ち込んだのか？」

「家に帰つてから気づいたんです・・・」

「きちんと確かめていれば主席だったものを・・・。吉井も、あのままテストを受けてそれなりの結果を出していれば、観察処分について検討してもらおうとしていたんだぞ？」

そう、アキは熱で途中退席した姫路に付き添つて保健室に行つたためFクラスになったのだ。

(もし、それを知つていても僕は・・・)

「僕は、姫路さんが苦しんでいるのをほつとくことなんて出来ませんでした」

そうキツパリと言ったアキのセリフを聞いて、俺は頬が緩んでいるのを止められなかった。アキを挟んで隣に立つ夏澄も同じように微笑んでいた。きつと同じこと考えてるんだらうな。

( (それでこそアキ(君)だな) )

「だが・・・よくよく考えれば3人が一緒のほうが良いのかもしれないな」

「?それってどういう・・・」

「吉井と東風谷がいれば、日下部の暴走を止められるかもしれんな」  
なんて鉄人が言うから、

「まさか。2人を巻き込んで騒ぎを大きくしてやりますよ」

そう言い切って、また余計なことと言われる前に2人の背中を押して校舎に向かう。

「いいの?あんなこと言って」

「大丈夫だって。それよりさ、今年1年楽しもうぜ!来年はこんな偶然無いだらうし」

「まず、ミナ君が成績を上げればいいと思います」

「夏澄の言とおりでよ」

「分かってるって！ほら、行こうぜ」

結構ワクワクしてたんだよなあ、俺たち。・・・Fクラスを見るまでは。

## 設定

くさかへ  
日下部 湊 みなと

所属 2年Fクラス

召喚獣 秀吉と同じような袴（色は藍）。武器は和弓（長さは召喚獣とほぼ同じ）

部活 弓道部

科目 得意 文系、特に古文と日本史

苦手 それ以外の教科 保健以外はほぼ壊滅

明久の幼馴染。日下部神社の神主の息子で、霊感が強いため幽霊が見える。

髪と目の色は、黒。愛称は「ミナ」。明久や秀吉ほどではないが、中性的な顔で女装をすればそれなりに可愛い。

幼い頃から、明久と一緒に古武術・日下部流を習っているが、未だ師範代（明久は免許皆伝で、師範になっている）。

年の離れた兄がいる。

こちたに  
東風谷 夏澄 かすみ

所属 2年Fクラス

召喚獣 女神をイメージさせる白いドレス。武器はトライデント。

部活 特に入っていない

科目 得意 保健以外

苦手 保健

明久と湊の幼馴染。明久の母方の従兄妹（母親同士が姉妹。明久の母が姉）で、湊の彼女。父方の祖母がイギリス人であるためか、髪の色が薄い灰色。従兄妹なので、明久の髪の色ウィッグを付ければアキちゃんそっくりになる。

明久と湊至上主義で、2人に害を成すと思われる人物が現れたら徹底的に排除しようとする（通称・黒力スミン<sup>ブラック</sup>）。  
瑞希とは小学校のときからの大親友で、明久とくっついてくれればいいのにも思っている。逆に、暴力的な美波は苦手。  
実は、学年主席クラスなのだが全てのテストに名前を書き忘れてFクラスになる。

吉井<sup>よしい</sup> 明久<sup>あきひさ</sup>

召喚獣 オカルト編のデュラハンの鎧。武器はロングソード。

・原作と違う点

成績は、悪くない。総合点ならBクラスの代表になれるほどで、日本史と世界史はAクラスレベル。

湊と一緒に古武術・日下部流を習っていて、高1のときに免許皆伝で師範になっている。

## 第2問

校舎に入ってFクラスの教室へと向かう俺たちだったが、話題は先ほど覗いたAクラスのことだった。

「Aクラスの教室、すごかったです・・・」

「システムデスクにリクライニングシート・・・たかが高校の設備にそこまで金掛けるか？」

「でも、あんなにすごかったら勉強に真剣になるのも分かる気がするよ」

「まあ、なあ。んで、教卓つつうかスクリーン？の前に立ってたのが代表なんだろうな。ホントなら立ってたのお前だったんだろ？夏澄」

「そっか、本当なら主席だもんね。ちょっと惜しかったかな？」

「ミナ君とアキ君が一緒のほうが嬉しいです」

そんな会話をしばらく続けていたのだが、

「・・・なあ、この扉ちょっと力入れて蹴ったら壊れるんじゃない？特にアキが」

「なんで蹴らないといけないんだよ」

なんて、扉の前で躊躇してたら、夏澄がガラガラと扉を開けた。



そんなこと・・・当たり前だろっ！！

「相変わらずじゃのう、おぬし等も」

「ん？秀吉もこのクラスだったのか」

「そうじゃ。しかし驚いたのう。まさか明久と東風谷がFクラスとは」

「事情があつてな」

俺の目の前にいる翁言葉で喋る美少女、いや美少年は木下秀吉。ちなみに、女子生徒やアキ以外に唯一夏澄とじゃれあっているのを黙認している存在だ。

「おはよう、秀吉。ねえ、席って・・・」

「好きな所に座って良いそうじゃ」

「なら、窓際に席が空いてるからそこ行こうぜ」

座った順番は、窓際から俺、夏澄、アキだった。始めは夏澄が窓際だったが、隙間風が寒そうだったから代わった。その時のアキの温かいような目に、一瞬イラっときたのでぶっ飛ばそうかと思っただがやめた。勝てねーし。

「相変わらず夏澄に過保護よねえ。日下部って」

「げっ！島田さん!？」

「ちよっと、吉井。何よ、その“げっ!”て？」

アキの真ん前を陣取っていたのは、島田美波。去年からのクラスメイトだが、度が過ぎるほど手が出やすいようで、アキがよく被害に遭っていた。そのせいも、夏澄は少し島田が苦手らしい。

「はあ、ひどい目に遭った」

俺の前の席にFクラス男子から逃げ延びたらしい妙にポロポロな雄二が座る。

「生きてやがったか。やっぱり図太いな」

「なっ！？元はと言えば「夏澄にあんな事言っただから、だろ」「うっ、

・・悪かったよ・・」

「今度は悪霊憑かせるからな。超強力なの」

「・・・ミナ君、霊能力ってそういう事につかうものじゃないです」

・・・・・夏澄が言うなら仕方ねえか、許す気はねえけど。

「そっぴやなんで明久と東風谷がこのクラスにいるんだ？明久はBクラス程度の学力だし、東風谷は主席だろ」

「全て無記名で出してしまったのです」

「全部か！？まさか、明久もか？」

「違うよ。僕は、」

明久がそう言いかけたところに、

「HRを始めますので、席についてください」

と、言って初老の男性教師が入ってきた。

いよいよ本格的に俺らのFクラスライフが始まるようだ。

## バカテスト1 科学

### 問題

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると、問題が発生した。この時の問題と、マグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは火にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点  
合金の例・・・ジユラルミン』

吉井明久の答え

『問題点・・・マグネシウムは酸化しやすく、火にかけると激しく発光して熱を出して危険  
合金の例・・・ステンレス鋼』

教師のコメント

正解です。姫路さんなのですが、吉井君もよく勉強をしていますね。ただし、ステンレス鋼はそれだけでは熱伝導率が非常に悪く鍋の材料としてはあまり好ましいものではありません。気を付けましょう。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払ってなかったこと』

教師のコメント

そこは問題ではありません。

日下部湊の答え

『合金の例・・・ミスリル銀』

教師のコメント

現実と二次元を分けて考えてください。

東風谷夏澄の答え

『合金の例・・・オリハルコン』

教師のコメント

日下部君とお付き合いをなさっているそうですが、変なところで影響を受けないように。

### 第3問

入ってきた男性教師はFクラスの担任だったらしい（名前は福原慎だ）。HRでのやり取りでクラスの全員が改めてここが最悪の環境であることを理解した。

「それでは廊下側の人から自己紹介をお願いします」

一番廊下に近い席に座っていたのは秀吉だった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい」

なんか一気に空気が変わったな。まあ、ただでさえ男子と女子の比率がすごいからな。女子扱いはどうかと思うけど・・・人のこと言えないけどな。

「・・・・・・・・土屋康太」

チツ・・・やっぱりこのクラスだったか。こいつが一番危険だからな。気をつけねえと。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は出来るけど読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

ここでチラッとアキを見て、言い放った。

「吉井明久を殴る事です」



りませんので。あと、アキ君は大事な幼馴染ですのでこの2人に危害を加えたりしたら、5倍にして返させていただきます」

・・・うっわあ、やっべ顔赤いかも。あとでアキにからかわれるっ！おおっと、次は俺か。

「日下部湊、弓道部だ。矢は、ワザと外したとき以外に外したことは1度もない。それと・・・実家は神社でな。普通の人より霊感は強いと思っている。特技は降霊術だ。・・・夏澄に手出そうなんて考えてみる、悪霊の強い憑かせてから矢の的にしてやる。・・・覚悟しとけ」

最後のセリフにはだいぶ力を込めた。これで言い寄ってくるバカなんて・・・ここはFクラスだったか。

あれ？誰か足りない気が・・・

「あの、遅れてすみません・・・」

ああ、姫路がいたのか。

## バカテスト2 国語

### 問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

東風谷夏澄の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
- 『(2) 踏んだり蹴ったり』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『サルも木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

日下部湊の答え

- 『(2) 弱らせて祟る(夏澄に手を出した愚か者共を)』

教師のコメント

問題の答えとしては惜しいです。ですが、人間性としては間違いです。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり(主に雄二が)』

教師のコメント

友人をそのように譬<sup>たと</sup>えるのは止めましょう・・・と言いたいところなのですが、そんな様子が頭の中に浮かんでしまうのは何故でしょうか。

## 第4問

俺の自己紹介の後、扉を開けて入ってきたのは姫路瑞希。振り分け試験のときにアキが連れ添って保健室に行き、Fクラスになった女子生徒だ。アキはちつとも気にしちやいないがな。

とにかく、姫路が入ってきたFクラスはにわか騒がしくなった。そりゃそうだろう。俺だって理由を知らなきゃみんなみたいに驚いたことに違いない。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

と、クラス内でも数少ない平然とした態度をしていた担任が話しかけた。

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします！」

そうあいさつすると、姫路は空いていた席に座った。俺の3つ隣の席、アキの隣の席だ。本人は気づいてないと思うけど。アキも若干嬉しそうだ。後でからかってやるうか。

「はいっ！姫路さんに質問です！」

自己紹介を終えた男子生徒の1人が高々と右手を挙げる（女子生徒は夏澄と島田しかいなかったのだが）。

「あつ、は、はいっ。なんですか？」

突然質問が自分に向けられて驚く姫路。

「なんでここにいるんですか？」

夏澄にした質問を姫路にもする。察しろとは言わないが、なかなか失礼なんじゃないのか？まあ、姫路がFクラスにいるなんて誰も思わないだろうが。毎回のテストで上位一桁に常にいるからAクラスにいるとおもっているだろう。

「その……振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……」

その言葉を聴き、クラス中が納得したように頷いた。試験を途中退席すると0点扱いになる。彼女は昨年度に行われた振り分け試験を途中で退席してしまったため、Fクラスになったというわけだ。

姫路の言い分を聴くと、クラス内でもちらほらと言いつの聲が上がる。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

これは……さすがはFクラス。予想以上のバカばかりだ。アキと夏澄の顔も苦笑いになっている。

緊張のためか、卓袱台に突っ伏していた姫路にアキが、

「おはよう、姫路さん」

と、話しかけた。

「よ、吉井君!？」

ずいぶん大袈裟な驚きっぷりだ。本当にアキが隣の席だということに気づいてなかったようだな。アキのFクラス入りの理由を知っているからか、申し訳なさそうな顔をしている。

「おはようございます、ヒメちゃん」

「え？夏澄ちゃん、何でここに？」

「全部の教科が無記名だったんだよ」

「あ、日下部君もこのクラスだったんですね」

「俺の得意教科が偏っていることは姫路もよく知ってるだろ？」

「でも、ヒメちゃんとも同じクラスでよかったです」

「はい。夏澄ちゃんや吉井君たちとも同じクラスで安心しました」

「ねえ、もしかして夏澄がFクラスになったのってミナのせいじゃない？」

「どうゆうことだよ」

「夏澄と一緒にのクラスになりたかったから無意識に呪いでもかけちゃったんじゃない？」

「うっ……」

マジでか……否定できねえ……

「でも、嬉しいからいいんです。ありがとう、ミナ君」

「おっ、おっ」

「ミナ、顔真っ赤だよ」

「るせえっ。それなら姫路が熱出したのはアキのせいじゃね？」

「え、なんで？」

「姫路と同じクラスになりたかったんだろ？あのままテスト受けてたらアキはAになるか、Bになるか微妙だったからな。同じクラスになるならこれが確実だ」

「そ、そんなこと出来るわけ」

「吉井君、ありがとうございます」

「え？お礼を言われることなんて」

「Fクラスにしてくれましたから」

「そんな、もしそうなら僕のせいで姫路さんが苦しんだんだから」

「嬉しいんです。一緒のクラスになれたから」

「そっか。なら、よかった」

「はいっ！」

（なあ、ピンクのオーラが見えるのは気のせいかな？）

（私にも見えます。ねえ、ミナ君）

（なんだ？）

（応援してあげましょうね）

（ああ、もちろん）

## 番外編1 俺と夏澄の告白大会

三月 長月中学校卒業式

明久と湊、夏澄も卒業生として出席していた。

『さあ、卒業式のしんみりムードは一旦忘れて毎年恒例の大・大・告白大会を始めますっ！』

『この大会では恋の告白はもちろん、担任や顧問への感謝の気持ち、高校への意気込みなど今までの積もりに積もった思いの丈をぶつけちゃって下さい！さて、司会を勤めさせて頂きますは元放送部3年桜庭と！』

『同じく3年市ヶ谷いちがやです！ちなみに、桜庭は で市ヶ谷は ですが、とりあえず本編に係かかわる予定はありませんのであしからず』

『オフレコな裏事情はそこまでにして、さっそく始めましょう！さて、トップバッターは・・・おおっと早速出てきたか【明久君ファンクラブ】！これは3年女子によって結成された同じく3年吉井明久君を陰ながら見守るといふものであり、本人すら知らないという全くの非公式クラブです』

『そして推測ではありませんが、学校全体の3分の1の生徒が入会しています。これは男子生徒込みです』

そこへ明久が湊に連れられ、2人のいる壇上へと上がって来る。

「ねえ、ミナ。なんで僕が呼ばれるの？」

「はあ？何を・・・」（コイツ、何のことか分かってねえな）

『おおっと、ココでハプニング！吉井君はまったく主旨を理解していません！』

『さて、このハンデをどう埋めるのか！？さあ、ファンクラブの皆様さんどうぞっ！！』

『吉井君（先輩）！！！！』

「は、はい！！」

『好きです！！！！』

「えっ、あ、ありがとうございます？」

『んん？これはOKか？初っ端から成功か！？』

「友達でも嬉しいよ、ありがとうございます」

「・・・なんでそんな答えになるんだ？」

「だって話したことない子もいるし。これを恋の告白だと思うなんて自意識過剰でしょ？」

『やはり、無理だったかあ〜！ハンデは埋まらず！』

『では、皆さん席へとお戻り下さい』

『・・・随分アツサリですね、桜庭さん』

『後が押しますから』

このあとも、告白などが続く。湊や夏澄も告白されたが、断った。

『さて、次で最後の挑戦者です。その前をとばしたのは私たちのせいではなく、アホな作者の頭が足りないせいですので、文句は作者までお願いします』

『ええ〜とだんだん桜庭さんが黒くなってきましたのでサクサク進めます。大トリは……おおつとようやく出てきたか、3年日下部湊君っ！お相手はもちろんこの方！』

湊と夏澄が壇上へ上がる。

『この2人がまだお付き合いをしていない事のほうがビックリですが、日下部君お願いします』

『いろいろ余計だ。……夏澄。俺の言いたいこと分かってると思っけど聞いてくれるか？』

『は、はいっ！』

『なあ、マイク貸してくれ』

『はい、どうぞ。どうせならバックに音楽も流すか？』

『市ヶ谷……楽しんでるだろ。いらねえよ』

そう言うと、深呼吸をしてマイクを口元へ持っていった。

『俺、日下部湊は東風谷夏澄のことが好きだあああああ……！……！……！』

『おおつとー！なんと情熱的な告白だ！』  
『はたして、東風谷さんの答えは？』

『私も・・・私も日下部湊君が好きっ、大好きです！！！』

『・・・あ、カ、カップル成立おめでとうございます！』

『これにて告白大会を終了します。最後なんで告白しますけど俺、桜庭さんが好きなんですよね』

『へえ、そうなんで・・・す・・・か？・・・え？』

『はい、帰った、帰った。いつまでも居座らないでくださいよ』  
『ちよつと、市ヶ谷君！？』

『なんだよ市ヶ谷の奴、良い所取りしやがって』

『もう、いいじゃん。それより、おめでとう』

『ありがとう、アキ君』

『ありがとな。それとこれからもヨロシク』

『うん。夏澄に変な虫がつかないように頑張ってね』  
『分かってるよ』

## 第5問

その後騒がしくし過ぎたのか先生に注意されてしまった。

それはそれで仕方ないのだがその直後、教室内が静まり返った。ポンポンと叩いただけで教卓が崩れ落ち、ゴミ屑となったのだ。

「え………替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生が気まずそうに出て行った。………こりゃ本気で考えないと………

「………雄二、ミナ。ちょっといい？」

「アキ？どうした」

「話があるんだ」

「別に構わんが」

「じゃあ廊下にも行くか」

一瞬だけアキが姫路を見たのが分かった。ああ、そういう事か。やっぱり考えることは同じだな。

「んで、話って？」

「僕からの提案。折角2年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「なんだ、先越されたか。Aクラスに仕掛けるんだらう？」

「うん、そうだよ」

「Aクラスに？………姫路と東風谷のためか？」

「えっ、ちっ………ちが「当たり前だろ、なに言ってるんだ。アキも、否定するな。相手への気持ちも否定することになる」………

姫路さんと夏澄はAクラスにいるべきなんだ」

本当ならあんなバカ共に埋もれてる様な人間じゃない。もしも俺たちのせいでこのクラスになったのなら俺たちの手でAクラスへと連れて行くのが妥当ってもんだろ。」

「まあ、いい。俺自身同じことをやろうと思っていただけからな」

「え、どうして?」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試みてきたくななるほど、雄二らしい理由だ。」

「代表がそんなこと言うんだから勝てるんだろっな?」

「ああ、作戦は考えてる」

「ねえ、2人とも先生が来たよ」

「じゃあ、戻るか」

先生が戻ってくると、また自己紹介に戻る。これって自分の番が終わるとすっげえ暇になるんだよな。眠くなってきたぜ。

「坂本君、君が自己紹介最後の1人ですよ」  
「了解」

雄二が席を立ち、教壇へ向かう。流石にいつものふざけた雰囲気ではない。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね」

そう問われ、頷く雄二。言っとくが何の自慢にもなりやしない。なのに、妙に自信有り気に俺らの方を向いた。



「俺たちFクラスは、

Aクラスに試召戦争を仕掛けようと思う」

### バカテスト3 英語

#### 問題

以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly」

姫路瑞希&東風谷夏澄の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

日下部湊の答え

「これは あります 本棚 それ 私 祖母 持っています 使用  
されます 定期的に」

教師のコメント

日本語として意味の通じる文章にしてください。

これだけめちゃくちゃで文章にすらなっていないのに単語の意味は  
合っているというのがなんとも・・・。

吉井明久の答え

「 \* (これは私の祖母が愛用していた本棚です。 ) 「

教師のコメント

日本語訳は合っていますので、日本語だけで書いてください。

## 第6問

雄二がそう言うのと、クラス内が静まり返った。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんと東風谷さんがいたらなにもいらない』

おい……最後の言った奴誰だ。

『調べてあげよか？』

『あげよか？』

（ん？ああ！頼んでいいか、2人とも）

『任せんさい』

『せんさい』

俺に話しかけてきたのは「貞子さん（仮）」と「花子さん（仮）」。  
小学校のトイレにいた姉妹の幽霊だ。仲良くなってから俺を助けてくれるようになった。ちなみに先に喋るのが貞子さん（仮）。あ、もちろん夏澄たちも知ってるぞ？見えはしないがな。

『ミナ、見つけた』

『みつけた』

（サンキユ。早いな、2人とも）

『当たり前だよ』

『だよ』

（後で教えてくれ）

『うん、分かった』

『わかった』

よし、これでいいな。・・・嫉妬深すぎかな、おれって。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

おっ、いつの間にか話が進んでたみたいだ。雄二がそう宣言していた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

「根拠ならある。それを今から証明してやる」

ニヒルな笑みを浮かべながら周りを見下ろしている雄二。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路と東風谷のスカートを覗いていないで前に来い」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

「っ、土屋君！」

首を振って否定しているが、顔に畳の跡が付いているからバレバレだ。

（ミナ）

（ああ。一発ずつだ）

後で一発ずつ殴ることに決めた。

「土屋康太。こいつがあ有名な、ムッリーニ寡黙なる性職者だ」



「木下秀吉だっている」

『おお．．．．．！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の．．．．．』  
「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って小学校の頃は神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが3人もいるってことだよな！』

あーあ。もうとっくに神童なんかじゃないのにな。言わないけど。

「それに、吉井明久と日下部湊だっている」

．．．．．シーン．．．．．

「ちよ、雄二！？なんでココで僕の名前が!？」

「オイオイ、アキはともかく俺まで呼ぶのかよ」

『誰だ？』

『さあ？』

「知らないなら教えてやる。コイツらは《観察処分者》と《<sup>ゴースト</sup>霊たちの支配者》だ」

『な、何!？』

『．．．．．なあ、ゴーストコントローラーはともかく観察処分者ってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ああ、そうだ「坂本君」．．．．．「冗談だ」

「なに言つてやがる。アキはAクラスに勝つための切り札だぜ」  
「ああ。観察処分者である明久はフィードバックがある代わりに召喚獣の扱いに慣れてる。しかも成績はBクラスの中でも上位に成る程だ」

『……………本当に勝てるかも』

「ああ、勿論だ。小手調べにDクラスをまず攻めようと思う。誰かにDクラスへの使者になつてもらいたいんだが……………」

「じゃあ、雄二。俺が行く」

「ん？大丈夫か？」

「任せとけ。なにされようが返り討ちにしてやる」

## バカテスト4 数学

### 問題

以下の問いに答えなさい。

『(1)  $4 \sin + 3 \cos 3X = 2$  の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する  $X$  の値を1つ答えなさい。

(2)  $\sin(A+B)$  と等しい式を示すのは次のどれか、?  
?の中から選びなさい。

OSB ?  $\sin A + \cos B$  ?  $\sin A - \cos B$  ?  $\sin A \cos B$  ?  $\sin A \cos B + \cos A \sin B$  『

姫路瑞希、東風谷夏澄の答え

『(1)  $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ? 『

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 $\pi$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1)  $X =$  およそ3 『

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(1)  $X = \frac{\pi}{6}$  『

教師のコメント

おいしいです。』 『を忘れないようにしていきましょう。』

日下部湊の答え

『(2)？、？、？、？のどれか。どつだー！』

教師のコメント

いや、どうだと言われましても。

## 第7問

早速Dクラスに宣戦布告に来た。ちなみに俺1人だぞ？アキや夏澄がいるのを知られるわけにはいかないからな。

「なあ、ちよつといいか？」

「なんか用か？」

「Dクラスの代表を呼んでくれないか？Fクラスからの宣戦布告だ  
何？」

俺がそう言ったとたん、男子数人に囲まれた。まったく、メンドクせえ。

「おい、何の騒ぎだ」

「代表、Fクラスから宣戦布告だつて」

「ん？おつ、平賀じゃんか！Dクラスの代表つてお前だったのか！」

「日下部？Fクラスの使者つて、お前が？」

「おつ。そうだけ」

「へえ。それにしても無謀な事考えたモンだな。FクラスがDクラスに勝てるんでも？」

「ナメんな。手加減なんかすんじゃんねーぞ」

「当たり前だろ。で、時間は？」

「今日の午後つて事で。どうだ？」

「ああ、それでいい」

「じゃあ、あとで」

「じゃあな。弓道じゃ勝てねえけど試召戦争じゃ負けないからな」  
「言ってる」

ガラガラ………

「あ、ミナ！お帰り」

「なんだ。無事だったのか」

「簡単にやられてたまるか。それとな、Dクラスの代表が平賀だったんだ」

「弓道部の平賀君ですか？」

「そうそう。平賀源二だ」

やっぱり夏澄とアキを連れていかなくて正解だったな。平賀も2人の成績は知ってるし。

「おい、屋上で話し合いするぞ。サツサと来い」

雄二がそう言うと、教室を出て行ったため俺たちも急いでついていく。アイツは待つってことを知らないのか？

扉を開けて屋上へ出ると、晴れてて気持ちいい。こういのが小春日和って言うのか？（あ、あれは冬か）

「おい、湊。ちゃんと伝えたな？」

「ああ。今日の午後って言ったぞ」

「なら、先にお昼ご飯ですね。はい、ミナ君の分です」

「サンキュ」

夏澄が俺に弁当をくれる。3人とも料理は出来るから交代で作っている。今日は夏澄の番だ。

「あれ？夏澄、僕の方は！？」

そつえば夏澄が出した弁当は2つ。1つは夏澄のもう1つは俺に渡したからアキのが足りない。

「今日はアキ君の分はありませんよ」

「え！？なんで？」

「私は作ってませんから。だってねえ、ヒメちゃん」

「え？あ、はい。吉井君、これ……………」

姫路が出したのは女子のより少し大きい弁当。ああ、アキの弁当か。それにしても……………。

「……………」

「湊、何故目頭を押さえておるのじゃ？」

「…………いや、なんでも」

こんなに料理が上達するとは思わなかった。

「そつえば聞きたかったんだけど。坂本、本当に勝てるの？」

「わしも気になっておったぞい」

「……………（コクコク）」

「大丈夫に決まってる。姫路に、東風谷に、明久がいるんだ。これで勝てないワケがない」

「そ、そうかな？」

「自信もてよ、いけるって！」

「そうですよ！勝ちましょうー！！！」

ここからFクラスの伝説がはじまる！！なんてな。

## 設定2

平賀源二 ひらが げんじ

所属 2年Dクラス

召喚獣 軽装のプレートメイルにマント。武器はバスタードソード。

部活 弓道部

科目 得意 文系

苦手 理数系

Dクラス代表。湊とは同じ部活なので、親交がある。その関係で明久や夏澄とも付き合いがある。

番外編に出てきた市ヶ谷は親戚らしい……………。

Fクラスとよく絡むというわけではないが、ちょくちょく出る。

ちなみに弓道で一度も湊に勝てたことはない。

「得意科目も俺に勝てないよな（笑）」

「日下部、笑うな！！」

## 設定2（後書き）

設定はアニメを参考にしてみました。

## 第8問

「秀吉、戦死なんてすんじゃねえぞ」

「分かっておる。でももう、わしはおぬしの方が心配なのじゃが・  
・」

「平気だよ。姫路が来るまでは引きつけるから」

たまにはカツコイイとこ見せたいモンだし。

「俺がやっても良いんだけどな」

「仕方あるまい。姫路がやった方が士気は上がるからもう」

「まあな。お、そろそろ行ってくるわ」

「気をつけての」

「せいぜい補習室で会わないようにな」

さて、アイツはドコにいるかな。

なるべく誰にも会わないように道を選ぶ。運が良かったのか、ニアミスしそうになったが真っ正面で鉢合わせになることはなかった。渡り廊下まで来たのだが、

「待ちなさい！豚野郎！！」

この耳障りな声は・・・

「ここは通しません！」

やっぱり清水美春か！？くそっ、ついてねえ。

「いい加減にしろ！！俺を巻き込むな！」

「何がですか！お姉さまに付き纏う豚野郎の分際で！」

「島田には興味ないって言ってるだろうが！！」

「なんですって！？ありません！」

「お前は俺に島田を好きにさせたいのか嫌いにさせたいのかはつきりしろ！！」

「お姉さまは世界一です！」

「意味不明すぎだ！！？」

もうヤダ、疲れる。頭の中どうなってるんだ。

「もういいです。あなたを倒してお姉さまを探しにいきます。試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>っ！」

「もういいのはコツチだ。………試獣<sup>サモン</sup>召喚」

まだ戦ってないのに、やる気が失せる。初召喚なのに。

俺の召喚獣は白と濃い青の袴に和弓。向こうは普通の鎧と剣。

「そんな武器で戦えるとも？」

「アホらしい。俺には十分だ」

清水が真っ直ぐ向かってくる。

Dクラス 清水美春 VS Fクラス 日下部湊  
化学 94点 VS 17点

「やはりFクラスですね。こんな点数でDクラスに挑もうだなんて」「だから?」

矢を一本だけ弓に番<sup>つが</sup>える。それだけでいい。

「・・・終わりだ」

弓を引き、離す。ピンツ、と空気が震える。

Dクラス 清水美春 VS Fクラス 日下部湊  
化学 0点 VS 16点

「なっ、どうして・・・!」

「どれだけ点数差があっても心臓狙えば即死だ。鉄人先生、早く連れてってくれ」

いつの間にか、後ろに居た鉄人に言う。

「西村先生と呼べ!清水、来い!補習だ」

「は、離しなさい!美春はお姉さまを探しに行くのです!!・・・覚えてなさい!」

ヤダ、メンドクさい。

あゝ、終わったかな。ちょっと見に行こうっと。

あれ？まだ終わってないのか。

「う、ごめんなさいっ」

・・・一振りで勝ったよ。凄いな。

「・・・勝ったんだ」

「みたいだな」

「あれ？ミナ、どこにいたのさ」

「ん、ちよっとな」

なんか姫路がコツチ見てる。

「アキ、姫路のトコ行ってやれよ。姫路もそうしてもらいたがってるみたいだし」

「え、そんなことないと思うけど・・・。うん、行ってくる」

さて、平賀と交渉してサツサと夏澄のトコに戻ろっかな。

## バカテスト5 物理

### 問題

以下の文の( ) ( ) に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、( ) ( ) である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

東風谷夏澄の答え

『ミナ君のお兄さん』

教師のコメント

日下部君のお兄さんの名前なのですか？知人の名前がとっさに出て

くるのは分かりますが、これは物理の問題ですので気をつけまじょう。

日下部湊の答え

『兄貴ではあるが、女装癖&ロリコン及びシヨタコンの変態。血の繋がりにあることにすら嫌悪感が生じるの』

教師のコメント

そこまで言わなくても。

## 第9問

Fクラスの勝利により悲鳴やら雄叫びやらが聞こえる中、俺は雄二の元へ向かう。

「雄二！」

「ん？ああ、湊か」

「悪かったな。俺が平賀の親衛隊を引きつけるはずだったのに」

元々の作戦では俺が攻め込むはずだったんだが、やっぱり清水に手間取ったのがまずかったか。

「お前のフォローは明久がしてくれたからな。それに、お前も役に立ったからな」

「はあ？何の話だよ」

俺がした事って清水を倒しただけだけだぜ？清水が重要人物ってならわかるが。

「なんだ、聞こえなかったのか？」

「聞こえる？」

「ああ。あそこまでしてくれたからな。士気が上がったぜ」

雄二が嫌な笑顔で見ている。・・・やな予感がすっげえする。

「お、いたぞ！」

「日下部、お前すごいよ！」

「漢だよ！」

「ホントだよ。まさか・・・」

「」「」「船越女史を呼び出すなんて!」「」「  
「……………は?」

俺が船越女史(45歳独身)を呼び出した……………だと……………?

「……………どうやって……………?」

「えーと、『日下部湊君が体育館裏で待ってます。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』って。須川が」「須川?へえ須川がねえ……………今どこにいるかわかるか?」

とりあえず須川、殺す。

「落ち着け。Dクラスとの話し合いが終わってからにしろ」

「いや……………先に殺らねえと気がすまない」

夏澄に聞かれてないよな……………?

「ちなみに言っておくが、あの放送を指示したのは俺だ」

そう言った雄二の腕を掴んだのは俺、ではなく

「……………きちんと聞かせてもらいましょうか、坂本君?」

黒いオーラを纏った夏澄じゆうまだった。

「こ、東風谷っ今までどこに……………」

「ええ。須川君とO・H・A・N・A・S・H・Iをちょっと」

顔を引き攣らせる雄二の前で夏澄は携帯を取り出した。なにか操作ををして画面を雄二に見せる。

「・・・電話帳？」

「はい。電話帳の力行のページです」

頭に？を浮かべる雄二の前でまた携帯の操作をする。

「私は今、キ行のページを出しました。これからある人に電話をかけようと思います」

「キ？・・・ま、まさか・・・？」

「坂本君の考えているとおりでしょうね」

「やめてくれ！！」

急に雄二の顔色が悪くなった。弱みを握っているのだろうか。

「ウフフフフ・・・」

思わず見惚れるような微笑みだが、目が笑っていない。余計なことをしないように俺は雄二を夏澄に任せ、さっさと交渉に行くことにした。

「待ってくれ、湊！」

「あら、どこへ行くこうというのですか。まだ終わっていませんか？」

「や、やめる・・・ギヤアアアアア！」

「クスクスクス・・・」

うん、気にしない気にしない。

「ミナ？雄二と夏澄は？」

「夏澄が黒カスミンにジョブチェンジした」

「？・・・ああ、あの放送。懲りないよね雄二も」

## バカテスト6 古典

### 問題

以下の問題に答えなさい。

『源氏物語の主人公の名前を答えよ』

姫路瑞希、東風谷夏澄、吉井明久の答え

『光源氏』

### 先生のコメント

正解です。ちなみに「光源氏」は本名ではなく、「光り輝くように美しい源氏の君」を意味する通称です。

### 日下部湊の答え

『第一部「桐壺きりつぼ」から第二部「雲隠くもかくれ」までは光源氏を主人公とした物語だが、第三部「匂兵部卿におうひょうぶがきょう」から「夢浮橋ゆめのうきはし」までは光源氏（実際は柏木）と女三宮おんなさんのみやの子息・薫が主人公となっている』

### 先生のコメント

日下部君がこんなにも丁寧で詳しく解答していたので驚きました。

### 須川亮の答え

『幼女を自分好みに育て上げるという大変うらやま・・・けしからん男』

### 先生のコメント

そこまでピンポイントで答えるなら人物名を答えてもらいたかったです。

## 第10問

「さて、待たせたな。平賀君？」

「姫路さんに吉井までいるとはな・・・」

「だから言つたる？『手加減なんてすんじゃねーぞ？』つて」

「たしかに言つてたけど・・・。まあFクラスを甘く見た俺達の負けだな。だが、こんな時間だ。作業は明日でいいか？」

「あ、必要ないぞ。Dクラスを奪う気はないから」

俺は平賀と親しいから交渉役をするために雄二に聞かされていたが、聞かされていないFクラスの連中がざわつきだす。

「いいの？あんなこと言つて」

「大丈夫だ、雄二が言い出したんだから。俺達の目的はAクラスだぜ？こんなところで満足してたまるか」

「・・・日下部、本当か？」

「条件はあるがな。雄二・・・Fクラスの代表が指示したらBクラスの室外機を動かなくしろ」

「そんなことでいいのか？ありがたく飲ませてもらうが」

もう1つの条件は俺の個人的なものだ。

「平賀は代表だからな。もう一個やつてもらつぞ」

「分かった。何をすればいい？」

「弓道場の掃除三ヶ月。俺の分変われ」

「ゲツ・・・マジか？」

「マジ。タイミングについては後日だ。もう帰つていいぞ」

「ああ。じゃ、Aクラスに勝てるのを祈つてるよ」

「嘘付け」

「ハハハ、さすがにAクラスには勝てるとは思わないさ」

平賀と別れ、俺とアキは教室へ向かう。

「ミナ、弓道場の掃除って自分が面倒だったただけだろ？」

「戦犯扱いされるよりマシじゃねーの？」

教室に戻ると、そこには

「あ、お帰りなさい。終わったんですね」

ニコニコと笑顔で自分の席に座る夏澄と、

「も・・・戻った・・・か（ガク）」

ぼろぼろで倒れている雄二がいた。

「夏澄、雄二に何したの？」

「えーと、女の子の秘密です」

つつこんだら負けな気がする。

「雄二、起きなよ。僕達帰るよ？」

アキが雄二を起こそうと揺すっていると、姫路が入ってきた。

「あれ？姫路さん、帰ってなかったの？」

「あ、はい。ちよつと用事があつて・・・」

「ヒメちゃん、終わったなら一緒に帰りませんか？」

「えつと、ごめんなさい。まだなんです・・・」

「そうですか、残念です」

「じゃあ俺達帰るけど。あんまり遅くまで残るなよ」

「じゃあね、姫路さん」

姫路を残し、俺達は教室を出た。もちろん雄二を引きずつて。・・・  
ホント何したんだ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0914p/>

---

俺と2人の文月ライフ

2011年10月30日05時10分発行